岩木山麓における縄文時代の竪穴住居址について

村越　潔

（一）

縄文時代の人々が住居として使用し、こんにちわれわれが発掘によって確認されるものには、竪穴、平地、敷石などの住居址がある。これらは同時発生でなく、それぞれ時代を異にして生じ、なかでも竪穴が古く、早期後半から出現して中期終末まで、もっとも一般的な住居であった。後期になると発見例がすくなくなり、そのためか、竪穴にかわって平地住居が一般化し、また関東および中部地方の一部では、敷石住居がつくられたといわれている。しかし次の弥生時代ならびに古墳時代でも、一般的な住居として竪穴が存在するので、縄文時代の後半、その例がすくなくなる点に奇異を感ずるが、しかしながら地域を異にして、なお一般的な住居であったように思われる。

われわれは、昭和三三年より弘前市教育委員会の委嘱をうけ、岩木山（海抜一六二五米）山麓の埋蔵文化財を、国の開発計画にもとづく開墾以前に、緊急調査をすることとし、すでに確認されている四七個所の遺跡から、二八個所を選んで実施した。その結果、次に述べるような戸の縄文時代竪穴式住居址を発掘したが、このなかにはいままで例のすくない後期の竪穴が、四戸ある。これらの住居址から出土した遺物は、整理中のものならびに、終了したものとがあって、一様でなく、発表まで期間を要するが、中間報告として紹介いたしたい。

なおこの論考は、昨年一〇月一六日弘前大学国史研究会第三回大会において発表したもので、その後資料の増加により、若干欠を補っている。

二

三ヶ年にわたる岩木山麓の緊急調査で、発掘された縄文時代の竪穴式住居址は、前述のごとく七戸ある。これらをその床面から出土した土器によって、時代ごとに分類すると、前記二、後期四、後期より晩期にまたがるもの一、となっている。この順序にしたがって述べてみよう。

A、前期の竪穴式住居址

浮橋遺跡で二戸発掘された。この遺跡は日本海にそゝぐ鳴沢川流域平野の東端より、西へ細長く張出した洪積台地の東南斜面にあり、地籍は青森県（以下県名を略す）西津軽郡鰺ヶ沢町大字小屋敷町字浮橋で、同期の貝塚と土師器の竪穴式住居址を伴っている。昨年七月二七日から八月一九日まで、弘前大学班が発掘にあたり、二、四号と称する縄文時代竪穴式住居址と、一、三号と名附けた土師器を出土する同式住居址を発見した（一、三号に関する記述は省略する）。貝塚は第四号住居址（以下四号址と略す）の南約一五米の地点に遺されており、淡水性のヤマトシジミを主とするものである。出土した土器は、第二号住居址（以下二号址と略す）および四号址の床面より発見された七ひとしく、二、四号址の人々が食した残滓を捨てたところであろう。

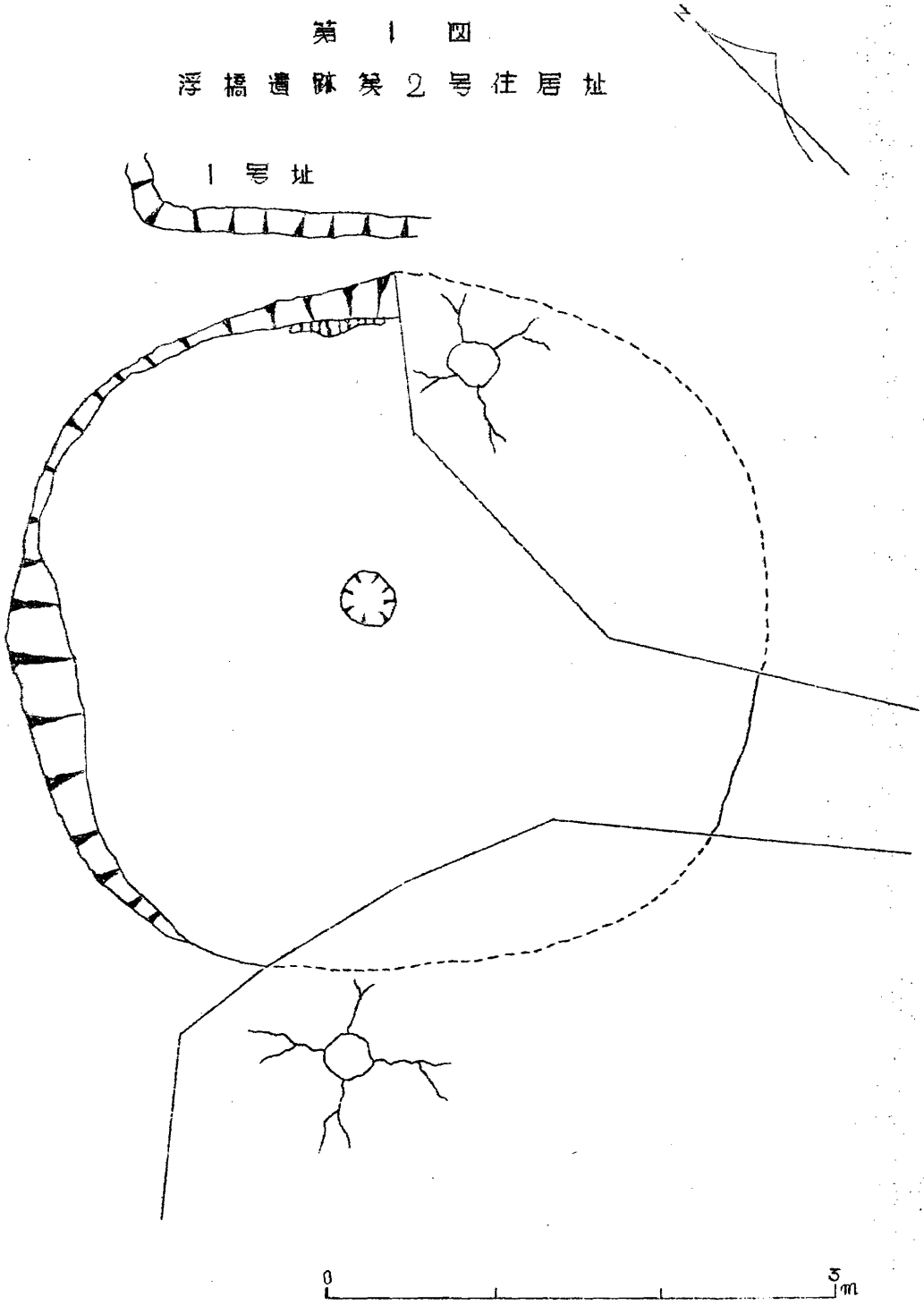
(イ)、二号址[1]

第一図のごとく、やゝ楕円形をなしている。地主の要望によって、立木を傷けまいとしたため、完掘することができなかった。したがって二分之一ほどは推測による。

この住居址は、地表面下約二五糎の黄褐色砂質粘土質土層を、二〇糎ほど掘下げて側壁と床面をつくり、東南側は傾斜面に接するため、暗褐色硬質土層を補充して床面がつくられている。大きさは長径四、四五米、短径四、〇五米あり、したがって面積は周壁上部で十五平方米（約四、七坪）、下部で十三平方米（約三、九坪）ある。周壁は露

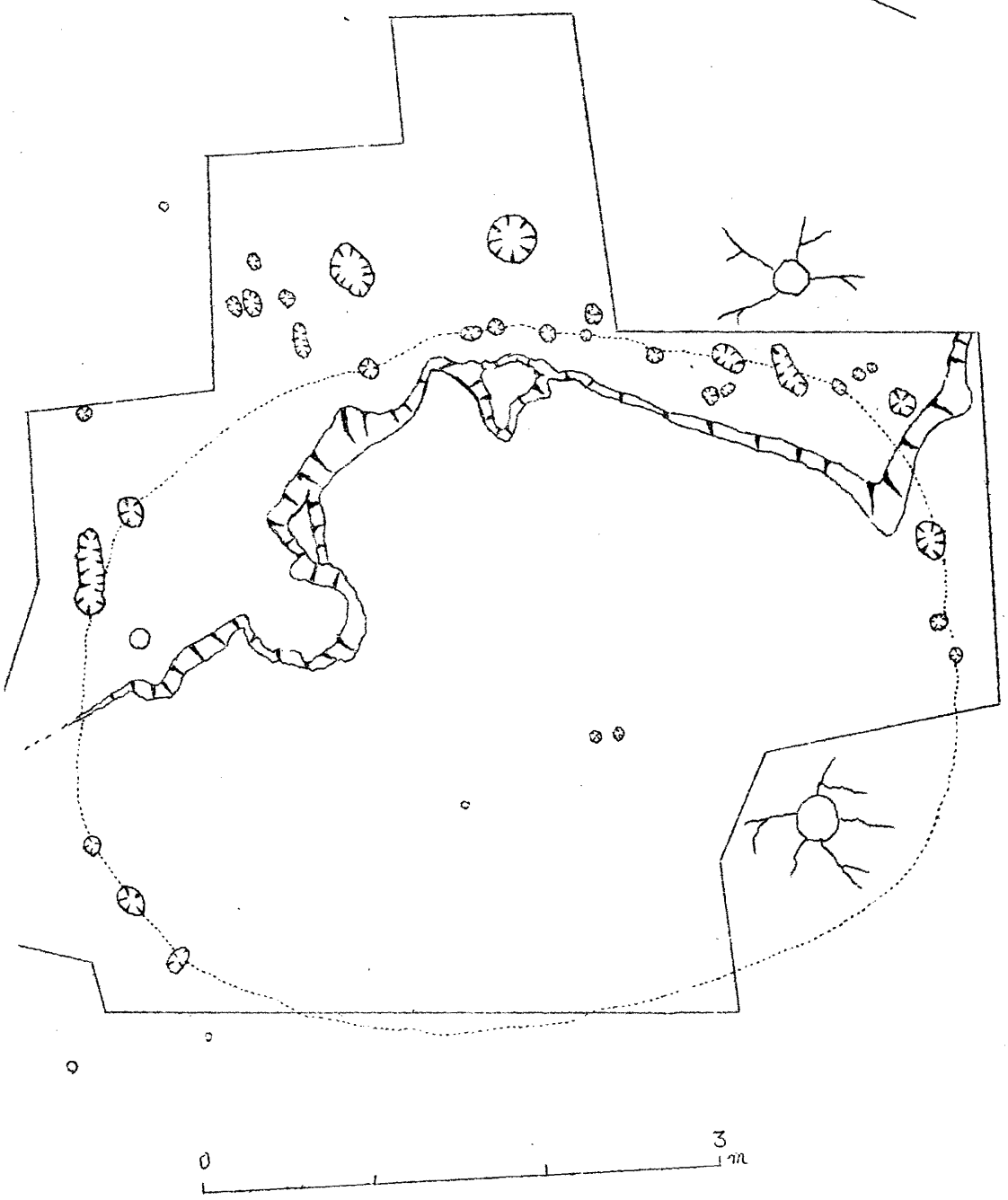
第 1 図

浮橋遺跡第2号住居址



第 2 図

浮橋遺跡第4号住居址



出された西北の部分でみると、内部へ緩斜している。るが、東南隅には前述の理由によって周壁の存在はみられない。床面は堅くふみ固められていたが、中央部から南寄り約三分之一は、他の土を補充したためか、比較的やわらかである。柱穴と思われるものは、床面の中央部に一の発見された、径三一、深さ二七糎ある。また北東隅の周壁下に細長い落込みを発見したが、規模の点において周溝とは考えられない。炉址その他の住居址に附属する遺構は、発見できなかった。

(ロ)、四号址[2]

第二図のごとく、きわめて不明瞭なもので、当初は住居址か否か、議論続出の有様であった。しかし北半の床面が、地表面の傾斜に対して平坦であり、遺物も多く出土したので、住居址と決定した。

この住居址は、地表面下約三〇糎（東側の部分）の深さに存在し、西隅は傾斜面のため露出していた。周壁と思われるものは、図のごとく不明確である。プランは柱穴をたどって、楕円形をなすと考えられ、それによる計測値は長径五、一五米、短径四、一〇米を計り、面積は約一八平方米（約五、五坪）となる。床面は堅く固められていたが、南側約三分之一は現地形と同方向へ若干下っていた。柱穴は三三発見され、平均九糎の深さで堀込まれていた。炉址その他の遺構は見出されなかった。

以上、浮滝遺跡発見の二、四号址について略述した。ともに出土せる土器から時代を推測すると、貝塚と同じく縄文前期に属し、前述したごとくこの二、四号址に居住した人々が、貝塚を遺したのであろうと考えられる。さらに同期の住居址が存在することを、トレンチによって確認したが、種々の障害によって調査することはできなかった。

B、後期の竪穴式住居址

この期に属するものは、前述のように四戸発堀され、その遺跡は次のごとくである。

1、西津軽郡鰺ヶ沢町大字建石町（合併前は同郡鳴沢村大字建石）字大曲開拓（大曲遺跡一号）

2、中津軽郡岩木町大字百沢字東岩木へ湯ノ沢

遺跡）

3、中津軽郡岩木町大字百沢字素岩木（一本木沢遺跡）

(イ)、六曲遺跡一号発見の住居址[3]

この住居址の所在する遺跡は、岩木山北麓を北流する鳴沢川に面した、左岸の台地上にある。昨年八月五日より二一日迄で、成田末五郎、戸沢武の両氏が担当者となり、弘前市教育委員会の人々を中心とした班によって調査された、その結果、秋田県大湯の万座遺跡出土土器を、標準として呼ばれる大湯式に類似の土器が、床面から発見されたという。

プランはほゞ円形をなし、南隅に方形の張出しがある。大きさは最大の径約三、七〇米、最短二、七〇米あり、床面は堅く、中央より東へ寄って石組の方形をなす炉址がみられる。柱穴らしきものは、大小八二発見され竪穴の内外にうがたれている。

(ロ)、湯ノ沢遺跡発見の住居址[4]

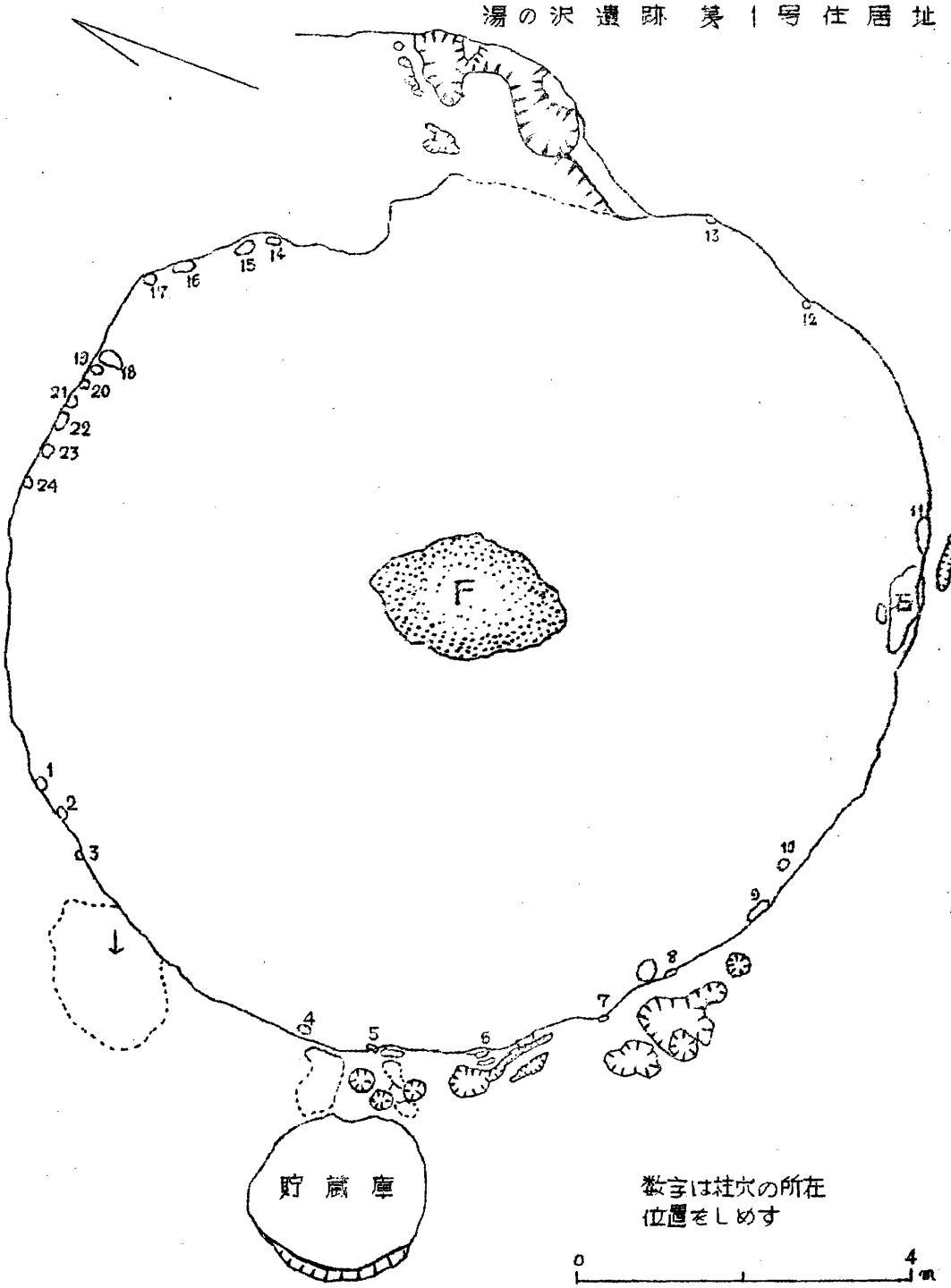
この住居址が所在する湯ノ沢遺跡は、岩木山の北東麓にあり、奈良竜の溜池へそゝぐ、湯ノ沢と称する小川に面した台地に存在する。昭和三三年七月五日より一一日まで、岩木山麓調査の第一号として、成田末五郎氏と私が担当者で、弘前大学生ならびに、弘前市教育委員会の人々を加え発掘を実施し、その結果、次に述べるような一、二号という二戸の住居址を発見した。

一号址

プランは第三図のような不整形の楕円をなす、大きさは南北五、四〇米、東西五、一〇米で、面積は二三、三平方米（約七坪）ある。赤褐色粘土質土層を、四五ないし五〇糎堀下げて、周壁と床面をつくり、その床面は堅くふみ固められていたが、凹凸はげしく、全体が炉址へむかって下りぎみであった。床面の中央部には炉址が存在し、径は一米一〇糎×七〇糎で、焼土の厚さ一〇糎を計った。柱穴は床面になく、周壁と床面の接点に二四発見され、四〇ないし四一度の傾斜で堀込まれていた。また竪穴外の西南部には、柱穴に相似する穴が、周壁にそってみられた。

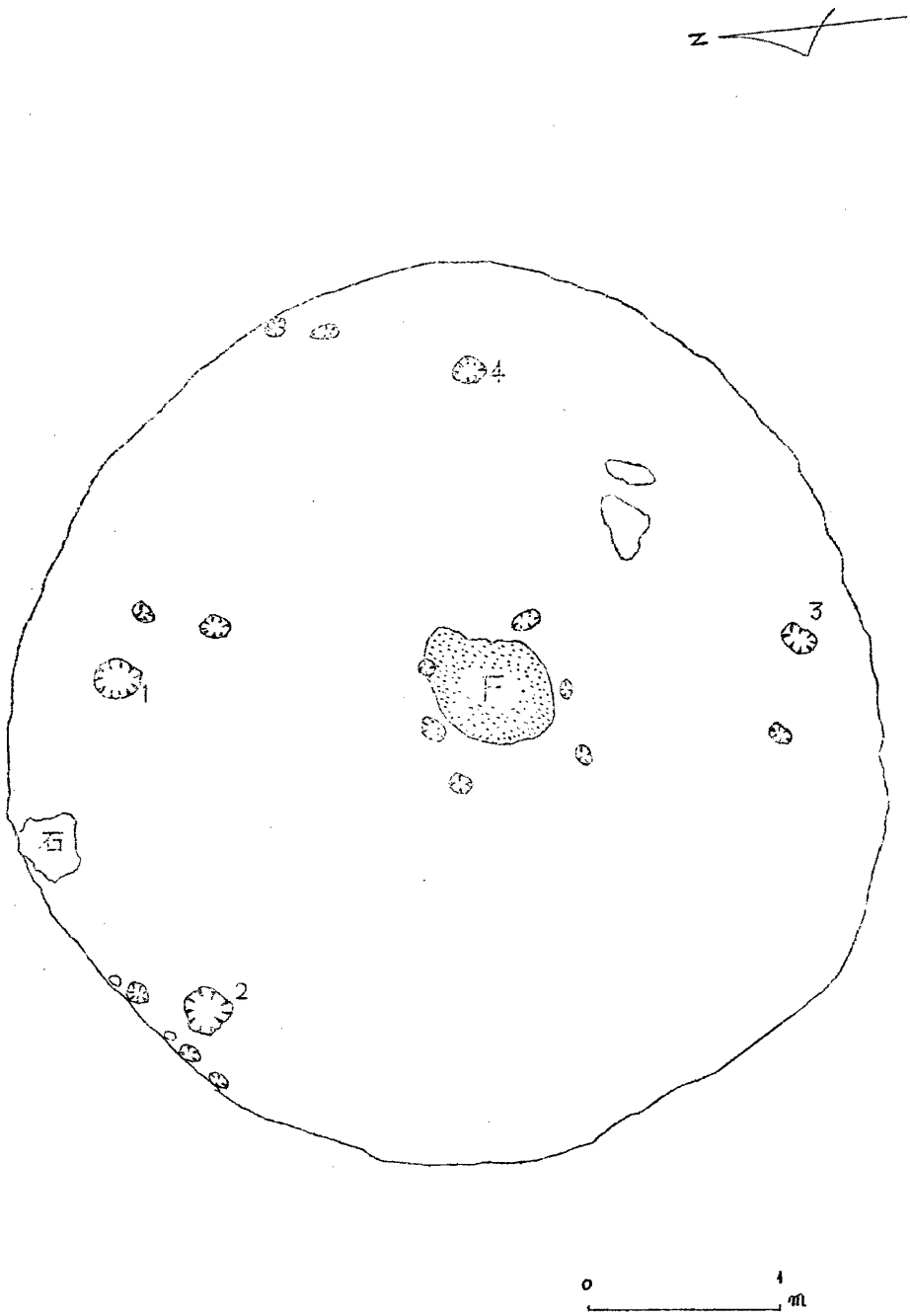
第 3 図

湯の沢遺跡 第1号住居址



第 4 図

湯の沢遺跡第2号住居址



二号址

第四図のごとくほゞ円形をなし、径は東西四・八三米、南北四・六五米で、面積は一七・二平方米（約五・二坪）ある。ベースの赤褐色粘土質土層を、三五ないし四〇糎堀下げて、周壁と床面をつくっているが、南側は傾斜面のため削られて、一四糎の壁高であった。床面は多少起伏するが、堅くふみ固められていた。炉址は中央部より若干東南に存在し、その径は六五糎×六〇糎で、焼土の厚さ一三糎を計った。柱穴は床面に一〇あり、そのなかで主柱穴と思われるものは四つ（第四図参照）みられ、また周壁と床面の接点に五つの小柱穴が、四一度の傾斜をもって堀込まれていた。さらに炉址を囲んで小柱穴が六つある。この穴は本址を遺した人々が、煮炊に用いた器物の支えと関係するものであろうか、他の類例を知りたいと思う。

以上が湯ノ沢遺跡発見の竪穴式住居址に関する概要である。ともに後期に属するが、床面より出土した土器をみると、若干の時代的な差がみとめられる。すなわち二号址が古く、土器は後期中葉のもので、関東地方における加曽利B式土器のような要素があり、一号址出土の土器は、それにつぐ安行1式土器平行と考えられる。したがって、二号址は後期中頃に、一号址は後期終りの築造物であろう。

(4) 一本木沢遺跡発見の住居址[5]

この住居址は、岩本山東麓海抜約二五〇米にあり、現在までに発掘された同山麓の、縄文時代住居址としては、もっとも高所にある。昨年七月一〇日より二三日まで、成田、戸沢両氏が担当となって実施した。薬師一・二号遺跡調査に附随しておこなわれた。

ローム化しつゝある褐色砂質土層を、一二ないし一三糎堀下げて、周壁と床面がつくられ、プランはほゞ円形をなし、径は約三・六〇米ある。床面は堅く、中央部よりやゝ西南へ寄って、焼土が分布するという。柱穴は発見されていない。出土土器は、湯ノ沢遺跡一号址に類似するといわれる。

C. 後期から晩期にまたがる竪穴式住居址[6]

大森勝山遺跡で一戸発掘されている。この住居址は、成田・戸沢氏と私が担当者になり、昭和三四年八月一八日より九月五日にかけ、調査を実施したもので、弘前市大字大森（旧中津軽郡裾野村大字大森）字勝山にある。

プランは楕円形を呈し、灰褐色粘土質土層を約五六糎掘り込んで、周壁と床面をつくっている。大きさは周壁上部の最大径一三・七七米、最短径一二・八〇米、周壁下部の最大径一三・二二米、最短径一二・二一米を計り、面積は一五〇・四平方米（約三七・六坪）ある。床面の周壁に近く、周溝のごとき凹ものがみられ、中の広い部分は四〇糎強、せまいところで四糎あり、また五ヶ所にわたって切れ、その間は径一〇ないし一五糎の小穴が連続している。したがって周溝よりも、穴が列をなして打たれていたのではなかろうか。床面は凹凸はげしく、北半に堅い部分がみられ、他は比較的やわらかである。炉址は中央部より東南へ寄って、大小二個の石で楕円形につくられ、径は東西一・四〇米、南北一・三五米、炉土の深さ一五糎を計った。柱穴をみると一五あり、その内訳は主柱穴四、小柱穴四、周壁に堀り込まれた小柱穴七である。

この住居址内より発見された土器は、後期末と晩期初のものがあり、発掘のさいなりびに整理中の所見では、床面出土の土器は後期が多く、内部を埋めていた土中には、晩期が多くみうけられた。したがって、本址は後期末から晩期初にまたがり使用されたものであろう。

三

岩木山麓において発掘された縄文時代の竪穴式住居址は、概観すれば時代と内部構造を異にしながらも、プランは円ないし楕円という、共通の形をなしている。このようなプランは、小林行雄氏の説によると、もとの家屋の形を考えた場合、家の外観は円錐形に近いものになるといわれる。[7] また住居であれば、出入口も必要と思われる。故後藤守一先生は、プランで家を想定することができれば、それに附随した張出部は、外にある構設と

思われ、古墳の玄室に対する羨道のごとき関係に似て、出入口とみるべきであろうと、述べられている。[8] 以上の事柄を岩木山麓の住居址に当てはめれば、明確に出入口のわかるものは、大曲遺跡一号発見の方形状を呈す張出部をもった住居址のみである。しかし湯ノ沢遺跡一号址のようにへ第三図参照）、東側の側壁が低く、竪穴外とほゞ同様な高さのものもあり、あるいはこのところを出入口としたのかも知れない。岩木山麓は雪丈頗の強いところであるから、おそらく住居址を遵した人々も、東あるいは南むきに、出入口を構設したと考えられる。

岩木山麓における住居址の大きさは、七戸を平均すると、長径五・八二米、短径四・九一米で、全国の竪穴の平均にほゞひとしいが、しかしなかには、一本木沢のような三・五〇米という小形のものや、大森勝山における一三・七七米のマンモス住居址もあり、これらをのぞくと、全国の平均よりも、むしろ小形に属する。

床面は、浮橋のごとく地形上の制約によって、傾斜するもの、ならびに他土の補充という、特殊な形態もみられ、また湯ノ沢一号址および大森勝山のごとく、中心部の炉址へむかって多少傾くものもある。堅さは、堅緻と称するほどのものはなく、ふみ固められた程度だが、前述のごとく他土の補充によってつくられた、浮橋二号址のようにやわらかいものもある。

炉址は、浮橋の前期に属する二・四号址にみられず、後期の大曲遺跡一号よりあらわれる。この住居址の炉は、一一個の石によってつくられた方形炉である。ところが湯ノ沢のように、後期後半では、簡単な焚火址に類するものとなり、次の時期に位置する大森勝山にては、石で囲った円形炉が出現する。湯ノ沢の場合、附近には石が多くみられるのにもかゝわらず、簡単な炉址であるのは、如何なる理由によるのであろうか。

四

縄文時代における竪穴式住居址のプランは、方形・長方形・円形・楕円形などがあり、その時代

的変遷は次のようである。

早期（方形）↓前期（方形、長方形）↓中期（円形・楕円形）↓後期（？）↓晩期（方形）

以上の変遷は、それぞれの時期に多い形をあげ（）したもので、すべてが当てはまるわけではない。たとえば、本州北端の青森県をみると、次のような変遷をなしている。

早期（円形）[3]↓前期（楕円形、長方形？）[10]↓中期（？）↓後期（円形・楕円形）↓晩期（楕円形）

両者を比較すると、まったく相違するが、これは地域差によるものであろうか。いままで詳細に調べられた関東と、青森県の両者明らかにされない以上、深く追究することもできないし、また本県の発掘例もすくないので、今後の研究問題に保留しよう。

附記

岩木山麓の緊急調査は、昨年度をもって主要部分を終了に、現在整理の段階に入っているが、この作業の済み次第、正式報告が刊行されると思われ、そのさいに欠は補いたいと考えている。

なお昨年夏、蒙恵山地区の新カメコ山において、成城大学班が二戸の縄文後期住居址を、発掘している。したがって、本山麓の総数は七戸となるが、成城大学班のものは詳細不明のため割愛した。

註

1)、2)岩木山麓古代遺跡（昭和三五年度調査中間報告）　弘前市教育委員会　昭和三六年四月を参照されたい。

3)田村誠一君（弘前藩の補助員、弘前市教育委員会勤務）の御教示と、岩木山麓古代遺跡（昭和三五年度調査中間報告）による。

4)岩木山麓古代遺跡（昭和三三年度発掘中間報告）弘前市教育委員会　昭和三四年四月、

拙著「岩木山麓湯ノ沢遺跡の竪穴住居址」、弘前大学教育学部紀要　第六号　昭和三五年一〇月。

5)田村誠一君の御教示と、岩木山麓古代遺跡（昭和三五年度中間報告）による。

6)拙著「岩木山麓の大森勝山遺跡で発見した大

竪穴住居址」　弘前大学国史研究　第一九、二〇合併号　昭和三四年一二月。

岩木山麓古代遺跡（昭和三四年度調査中間報告）　弘前市教育委員会　昭和三五年五月。

村越「青森県弘前市大森勝山遺跡の大竪穴住居址」　日本考古学協会研究発表要旨二五。

7) 小林行雄「日本考古学概説」　創元社　昭和二六年一二月　二六頁。

8) 後藤守一「上古時代の住居」（人類学先史学講座）（中）雄山閣一五〇、二〇二頁

9) 江坂輝弥「青森県三内郡大館村十日市字赤御堂貝塚の調査」日本考古学協会研究発表要旨一八　昭和三一年一一月。

八幡一郎編「世界考古学大系」第一巻　日本一「先縄文・縄文時代」　平凡社　昭和三四年六月　四二頁。

10) 成田彦栄「県文化界この一年」　東奥日報昭和三三年一二月一九日（夕刊）。